

「やりたいことがわからない」のはなぜか

— 若者が直面する困難 —

伊藤賢一(群馬大学)

はじめに

『(私)をひらく社会学』(豊泉周治ほか, 2014)にも載せたエピソードだが、数年前指導学生の一人から「自分のやりたいことがわからないので、どういふふうに就活をしたらよいか困っている」と相談されたことがあった。たいていは親の希望や友人・先輩などのアドバイス、大学の就職支援窓口からの紹介などがあって何とか就活に臨むものであるが、この学生は、親に相談しても「自分のやりたいようにしろ」としか言われぬ、と本当に困っている様子であった。

個人的にさまざまな事情があったのだとは思いますが、社会学的想像力(Mills, Ch. W.)を働かせるならば、彼の悩みにはより大きな社会変動の影響を読み取ることができよう。あるいは、少なくとも社会的文脈に置いてみることで、現代の若者が直面している困難をかいま見ることができるのではないだろうか。

第一に、この悩みは「職業選択の自由」があるからこそ現実のものとなる悩みであって、近代社会が実現してきた自由化の意図せざる結果、あるいは後期近代に登場してきた個人化(Giddens, A.; Beck, U.)の顕れ、と解釈できる。われわれは誰もが自分の人生の「作者」として選択に次ぐ選択を、と同時にその責任を引き受けることを強いられるもいる。注意しなければならないのは、この「選択」は可能性でもあるが同時に強制でもある、ということである。近年の雇用環境や就職状況を考えれば、この「選択」は決してバラ色のものではありえない(1)。

第二に、将来の夢や希望を育む人間関係の危うさを読み取ることもできよう。われわれがアイデンティティを確立し、自分の個性や傾向を見出していくことが可能なのは、他者とのコミュニケーションを積み重ねていくことによってである。自分が何者であるか、どんな存在でありうるか探究し答えを見つけていくことは、青年期特有の、いわば普遍的な発達課題ではあるものの、現代社会の「歪み」がここに影響しているとも考えることもできる。さまざまな若者研究が示唆する関係性の変容は(浅野, 2006; 辻, 2006; 土井, 2008; 加藤, 2014)、現代に生きる若者たちの間に以前のような相互承認が成立しにくい状況を作り出している可能性を示唆している(2)。

第三に、さらに状況を複雑にしているのはメディア環境の進歩とそれがもたらす意図せざる効果、といえる。原田曜平(2010)が指摘しているように、SNSの普及は若者たちの間にそれまで考えられなかったような持続的な相互監視状況を作り出している可能性がある。もちろん、原田の指摘するような新しい「ムラ社会」が成立していると即断することはできず、デジタル機器やネット環境をしたたかに使いこなしている若者も少なくないという指摘もある(boyd, 2014=2014)。とはいえ、状況の複雑化は否定できない(3)。

本報告は、いわば『(私)をひらく社会学』の続編であり、現代社会に生きる若者が直面している困難を社会的に読み解くことを目指すものである。

1. 「やりたいこと」はいつ決められるか

社会で必要とされる能力を身につけ、自ら職業選択を行うことは近代社会に生きるわれわれにとって普遍的な課題である。Giddens や Beck 等が指摘する「個人化」が進めば進むほど、同時に「選択」に伴う責任も増してくるが、近年の雇用環境の悪化や若者の離職率の高さに呼応する形で、就職に向けたキャリア教育が中等教育や大学でも行われるようになってきた。

児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』(2013)は青少年向けの本だが、現在行われている「キャリア教育」の問題点を 3 点指摘している。すなわち、①「やりたいこと」探し、②職場体験、③キャリアプラン作成、がはらむ問題点である。②③もそれぞれ問題だとは思われるが、われわれの文脈で重要なのは①の点である¹。

これに関しては、冒頭で述べた学生の言っていたこととも関連するが、社会のことも職業のことも知らない生徒・学生に「やりたいこと」を無理やり言わせ、書き出させることにそもそも無理がある、という指摘である。考えてみれば、就学前から当の本人には何度もくり返し浴びせられていたであろうこの問いは、確かに無理難題と言えるものかもしれない。たとえ暫定的なものだとしても高校生や大学生の時点で「やりたいこと(職業)」を選ばせようとするのは、一度もデートしたことのない相手に結婚を申し込むようなもの(Krumboltz & Levin, 2002=2005)なのかもしれない。

いうまでもなく、社会状況(とりわけ雇用)も流動化し、かつてない速さで変化している。いまある職業が、小学生が就職するときにまだあるのか、あるいは高校卒業時にある職業が 20 年後、30 年後にも安泰なのか、自信を持って答えられるケースは多くない²。

さらに、正社員(正規雇用)プレッシャーの存在を指摘しなければならない。正社員になれて、しかもその「身分」を継続できるのは一部のみになってしまった。たとえば、平成 25 年「若年者雇用実態調査」(厚労省)では、若年正社員 68.2%に対して正社員以外の若年労働者は 31.8%であるが、その若年正社員のうち 25.7%は転職を考えているという。複数回答の「理由」のうち、「賃金の条件がよい会社にかわりたい」が 44.6%でトップである。大部分が正社員になれて、同じ職場で継続的に働くのが標準的なコースとはもはやいいがなくなっている。

にもかかわらず、いや、だからこそ、キャリア教育の現場では、(善意から)もっぱら非正規雇用、フリーターの悲惨さを伝えることに力点が置かれている(生涯賃金の差!)。大学関係者は生き残りのためには「ウチの大学を出れば大企業の正社員になれる!」と言い続けなければならないが、これは意図せざる効果として、正社員信仰をますます強化することになってしまう。「失敗するととりか

¹ 児美川 (2013) は、ほとんどの中学が導入している職場体験は一過性のイベントに過ぎず、キャリアプラン作成があまりにも目的合理的で融通が聞かないものになっていると批判している。

² デューク大学のキャシー・デビッドソンは 2011 年 8 月に『ニューヨークタイムズ』紙上で、「米国で 2011 年度に入学した小学生の 65%は、大学卒業時に今は存在していない職に就くだろう」と述べて、日本でも話題になった。

えしのつかない選択」という圧力が高まっている。実際には学生がある業種や会社を「選択」したからといってそこに就職できるとは限らないのに、である。

2. 関係性の「自由市場化」

前述したように、他者とのコミュニケーションを積み重ねて相互に承認しあう関係を築くことは自分自身を知るためには重要であるが、少年期・青年期の人間関係の近年の変容は、将来への展望を育みにくいものになっている可能性がある。

たとえば辻泉は若者の友人関係が「自由市場化」していると指摘している(辻 2006; 加藤 2014)。従来のように、同じ境遇(同じクラス、同じ地域)にいるから仲良くするというのではなく、ヴァーチャルに広がったネット上のコミュニケーションの海の中から、選択的に同質の相手を選んでいく人間関係が登場している、というのである。これは、一見、自由で開放的な世界のようにも思われるが、結果的には似たようなライフスタイルや価値観をもった仲間同士で「内閉」していく可能性が高い。仲間内では人間関係への満足度が高いものの、異なる価値観や信念をもっている外部の他者には「対人恐怖的」に振る舞うことになる。

誤解してならないのは、こうした選択的な友人関係と並行して、クラスや「ジモト」といった従来型の関係も継続しており、その関係は土井(2008)や原田(2010)が指摘するような、互いに空気を読み合うような、同調圧力にさらされた「濃密な」ものにいつでも転化しうることである。

いずれにせよ、狭い人間関係からなかなか外部に出ないことになり、キャリア教育の点ではマイナスに作用する可能性が高いといえるのではないか。

3. 多様な情報が入ってこない「情報化」

友人関係の「自由市場化」や、友人関係の「濃密化」は、情報化の直接的な帰結でもある。もちろん情報化そのものは、社会の仕組みについて学ぶチャンスを広げてくれるので歓迎すべき側面があることは確かである。研究職の仕事がどういうものなのか、宇宙飛行士になるにはどうしたらいいのか、現代の学生や生徒であればネットから容易に情報を引き出すことができる。

とはいえ、入ってくる情報が「偏向」してしまう可能性は常にある。LINE や Facebook、twitter では、友人がリンクを貼ったニュースがどんどん入ってくる。関心や価値観を共有する友人同士の空間で、これを貼ったら自分の友人たちにウケる、ということは事前によく分かっているし、逆に「空気を読まず」に、仲間を不快にすることが十分予想できるようなニュースはおそらく貼らないであろう³。

もちろん、dana boyd(2014=2014)がいうように、若者とは昔から仲間同士でつきあうことを好み、大人に反発し自立しようとさまざまに模索するという側面をもつものだが、今日のデジタル環境は友人間の同調圧力をより強化する状況を作りがちである。

もっとも、そこには常にノイズ的なものが入るので、閉じた情報空間になるとは言い切れない部分

³ Sunstein(2001=2003)のいうサイバー・カスケード(cyber cascade)が形を変えて起こっているとも考えられる。

もある。価値観を共有した仲間といっても、部分的に共有しているに過ぎないので、思わぬ新しい観点や情報を誰かが伝えてくる可能性はある。

おわりに — 自己責任論の蔓延とその解体

雇用の流動化や、それを前提とした「キャリア教育」は、結果的に若者の間に「自己責任論」的価値観を蔓延させることになる。努力してよい大学に入り正社員になる、という安定したコースを求めるとは、非正規の仕事に付いている者を「努力が足りなかった」と切り捨ててしまいがちである。

こうした見方を解きほぐすことこそが教育に求められるのではないだろうか。本人の努力や能力と関係なく、失業したり非正規の仕事に付かざるをえないケースは多々ある。公共的な視点、社会福祉やセーフティネットの必要性、労働法を含めた労働者保護の仕組みを学ばせる必要がある。

「やりたいことがわからない」のはなぜか、という問いに対して『〈私〉をひらく社会学』に書いた第一の回答は「承認してくれる他者がいないから」というものだった。それ事態は正しい指摘であったと今でも考えているが、補足すべき第二の回答として、そもそも「やりたいこと」モデルそのものが非現実的で現代の社会状況に即していない、という点を強調すべきであると考えている。

文献

浅野智彦編, 2006, 『検証・若者の変貌』, 勁草書房.

boyd, danah, 2014, *It's complicated: the social lives of networked teens*, Yale University Press. = 2014, 野中モモ訳, 『つながりっぱなしの日常を生きる — ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』, 草思社.

土井隆義, 2008, 『友だち地獄 — 「空気を読む」世代のサバイバル』, ちくま新書.

原田曜平, 2010, 『近頃の若者はなぜダメなのか — 携帯世代と「新村社会」』, 光文社新書.

伊藤賢一, 2014, 「やりたいことがわからない — 自由化／個人化の帰結」, 豊泉周治ほか, 『〈私〉をひらく社会学 — 若者のための社会学入門』, 大月書店, pp. 146-164.

加藤篤, 2014, 「若者の〈つながり〉をどう考えるか — 若者の友人関係に関する研究を手がかりにして」, 長田攻一ほか編, 『つながるつながらないの社会学 — 個人化する時代のコミュニティのかたち』, pp. 108-133.

児美川孝一郎, 2013, 『キャリア教育のウソ』, ちくまプリマー新書.

久木元真吾, 2010, 「「やりたいこと」の現在」, 小谷敏ほか(編)『若者の現在 労働』, 日本図書センター, pp. 117-148.

Krumboltz, J. D. & Levin, Al. S., 2002, *Planned Happenstance: Making the Most of Chance Events in Your Life and Your Career*, Impact Pub. = 2005, 花田光世ほか訳, 『その幸運は偶然ではないんです』, ダイヤモンド社.

Sunstein, C., 2001, *Republic.com*, Princeton U. P. = 2003, 石川幸憲訳, 『インターネットは民主主義の敵か』, 毎日新聞社.

辻泉, 2006, 「「自由市場化」する友人関係 — 友人関係の総合的アプローチに向けて」, 岩田考ほか編, 『若者たちのコミュニケーション・サバイバル — 親密さのゆくえ』, 恒星社厚生閣, pp. 17-29.